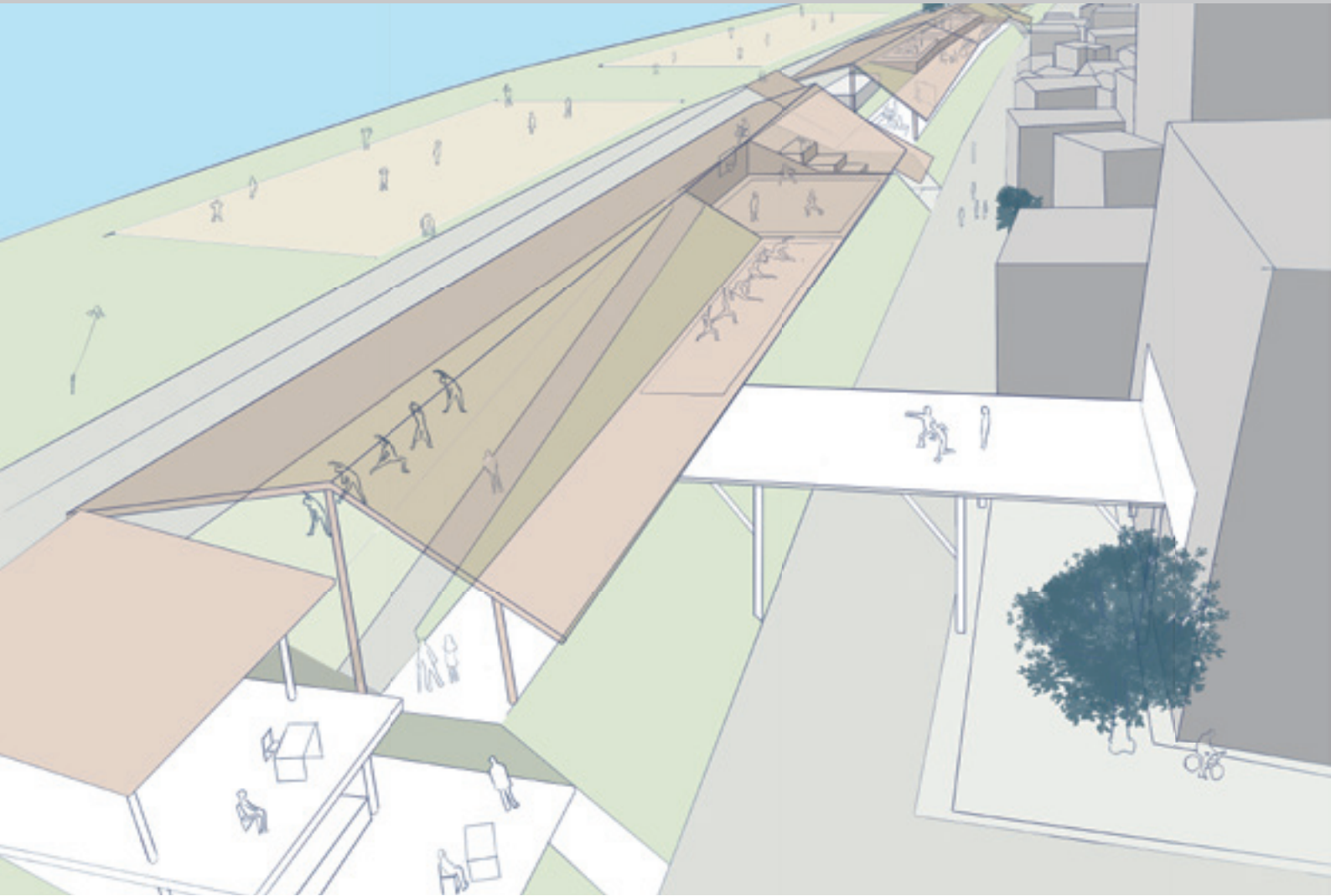
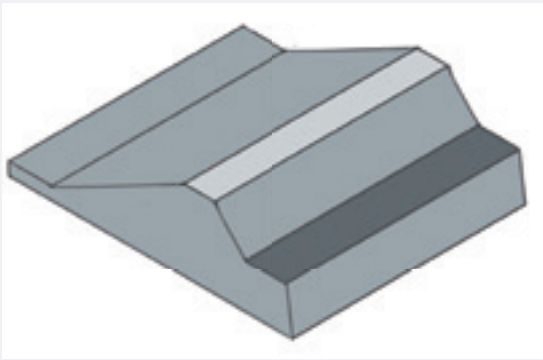




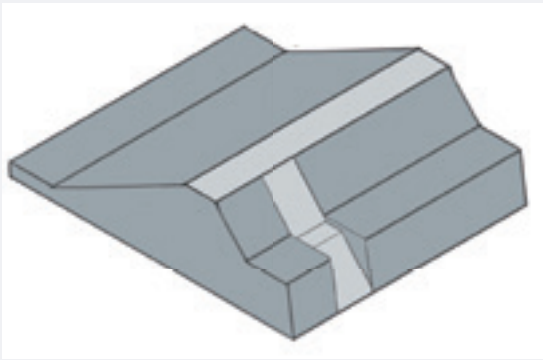
1. 土木で出来た形に居場所を見出す

土木事業や高架などの建造物は街の景色に大きな影響を与えてきた。中でも町の景観に大きな影響を与えてきた堤防は台風 19 号の大雨により多摩川が氾濫したことを契機として、存在意義を問われている。

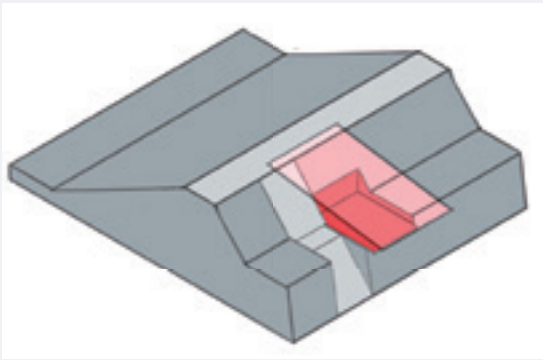
防災のための物から、身体感覚をよりどころとして町の人が寄り集まる為の居場所として人と土木の関係を考えられないかを考えた。



車のための道、
防災のための盛り土



人が堤防へ直接
アクセスする



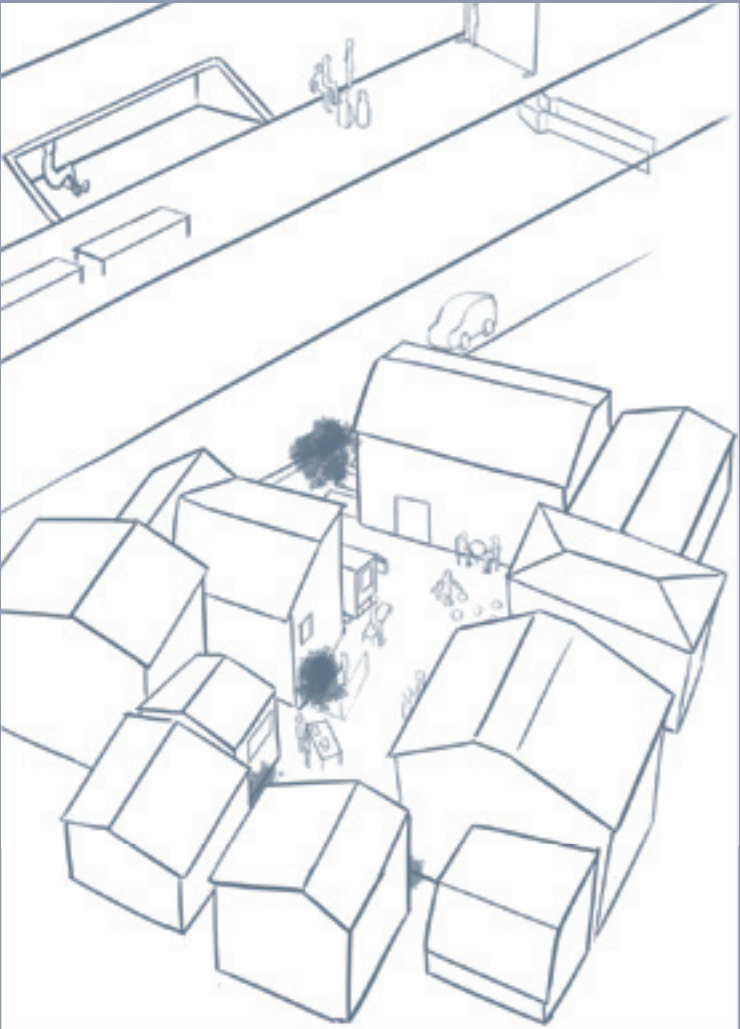
堤防という空間が
共同体の軸になる

どんな一日であろうと 体の置き場を作る

近代の土木事業と車中心の道が街中に広がる事で、街区で共有されていた地面が人の居場所ではなくなった。

この変化によって、近所の人たちが立ち話できる袋小路や、独りになりたい時訪れる空き地の陽だまりが奪われた。しかし実際に近代土木と街が衝突する部分を訪れると、堤防の下から堤防上へ上ることで街の内部にはない開放感を得られたり、朝の日光を堤防の上で浴びて家に戻ったりと、堤防上の空間と街中の小さな空間の 2 つの場所を使いこなす楽しさがあると感じた。

車や敷地といった制度的なもので計画された区切りから開放されて、街と堤防とを自由に行き来する居場所があることで、どんな 1 日であっても体を使って過ごせる街になるのではないかと考えた。



2. 敷地 足立区柳原町の堤防

堤防が作った切斷

近代の土木事業で、まちが分斷された



窓からの眺望が共有出来なくなった。



堤防を走る車道によって
水との関係が切斷される。



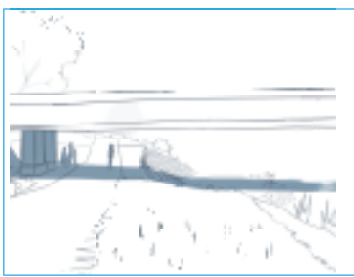
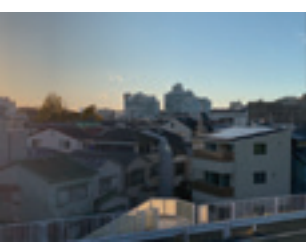
庭として共有されていた道が切斷されて
機能を失う。



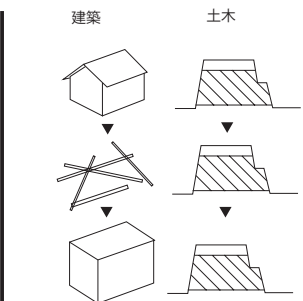
堤防によってコミュニティを
作る構造体が失われた。

堤防がもたらした資源

まちにはない、静かで広くて
明るい風通しの多い場所が広がる



堤防によってコミュニティを
作る構造体が失われた。



時間

堤防がもたらした風景



街には昔ながらの商店街や大規模な祭りを行う神社等身体スケールに近い空間が残されており、その外側にはレベル差によって分斷された堤防上の空間が街を見下ろせる形で連なっている。近代土木がもたらした風、光を街に開きたい。



荒川放水路によって切斷された地域が敷地である。荒川放水路の開削事業が木造住宅の密集する地域を横断し、街の中に建物ほどの高さの堤防が現れた。

敷地 足立区柳原町の堤防

街から堤防への歩行経験

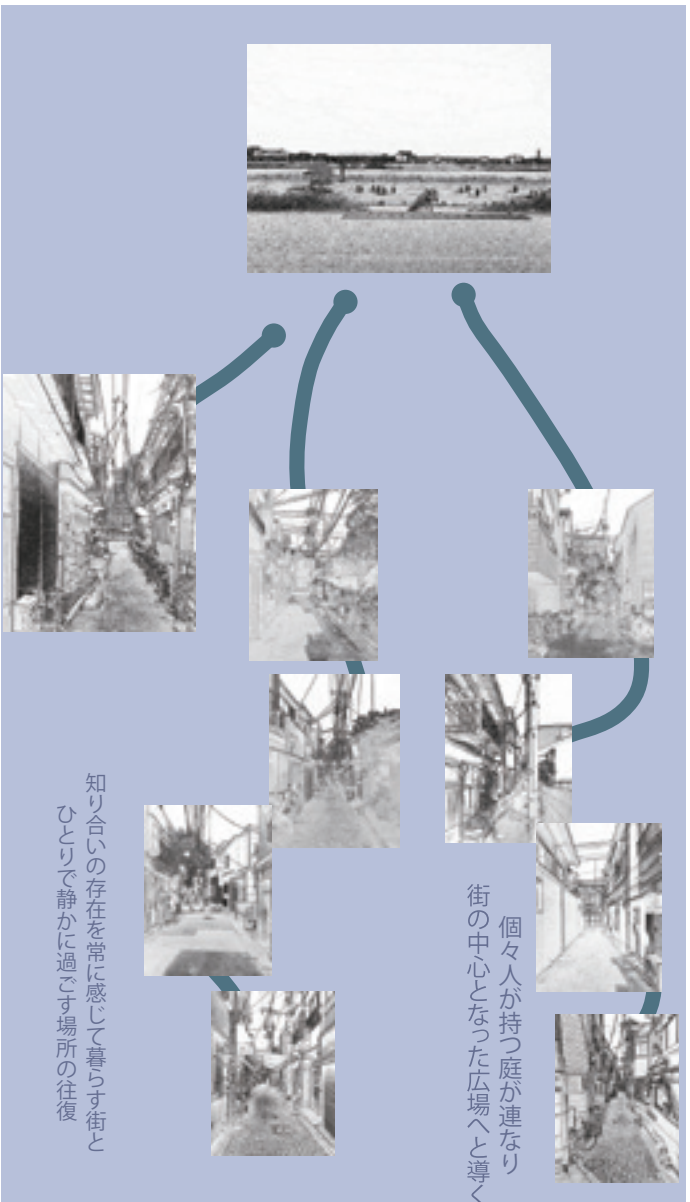
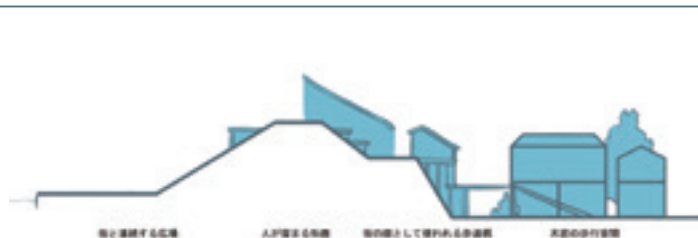
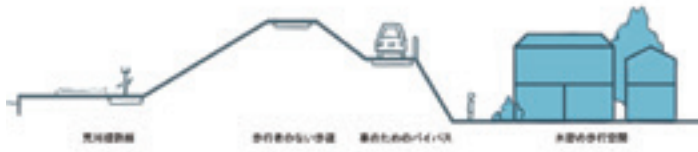
この町は車通りが少なく歩行に適した構造をしており、町の中から堤防を登っていくことで町の人々は木密の中にはない風通しと日当たりがある見通しの良い空間へと出る。コントラストに富んだ歩行経験を活かし、堤防の空間を軸にした町の構造体を作ることが提案の目的である。



堤防と街を往復する生き方

街の広場として堤防が開かれることで、日当たり、風通し、賑わい等の身体感覚をもとにして自由に町全体を使いこなす暮らしが可能になる。

堤防と街の繋ぎ方



日常の活動を包み込む堤防と街の隙間

A: 堤防斜面と大屋根下の空間

B: 地面の窪みと屋根の隙間

C: 階段状に連なるテラス

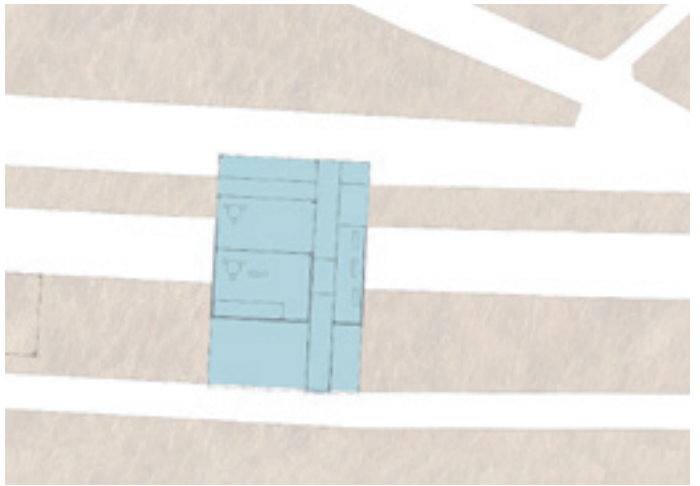
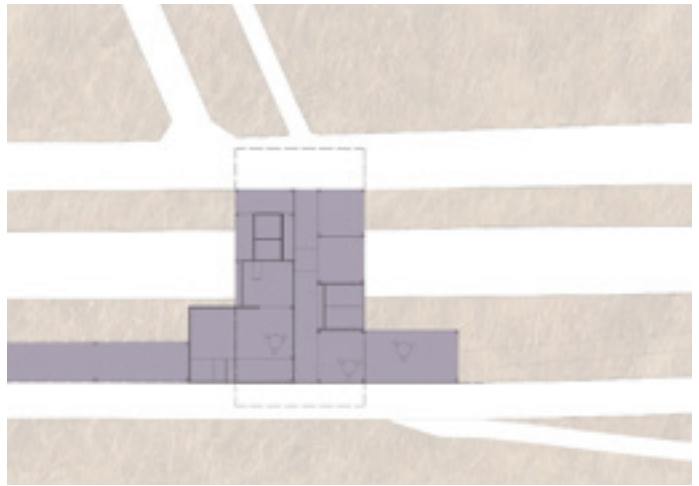
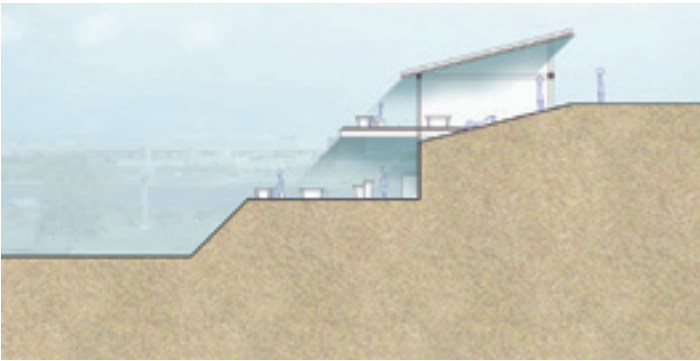
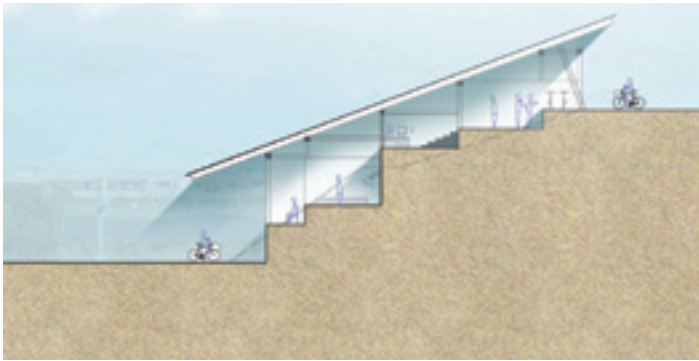
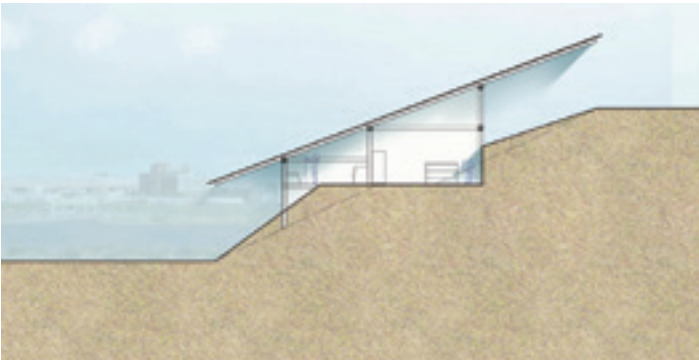
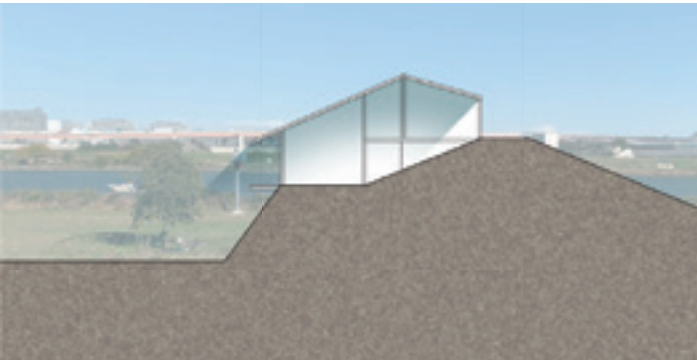
D: 2 段のテラスとその間

河川敷へ繋がる堤防上の賑わいと、川岸の光や音が流れ込む屋根との隙間が人の居場所となる

地面と屋根に囲まれた場所で洗濯時間を待つ。

小さな居場所を少しずつ登っていくことで、自転車の修理を待ちながら眺望を共有する。

回遊性のある坂の寄り道で広がる景色を見ながら一休みする。



平面配置図 S=1/12000

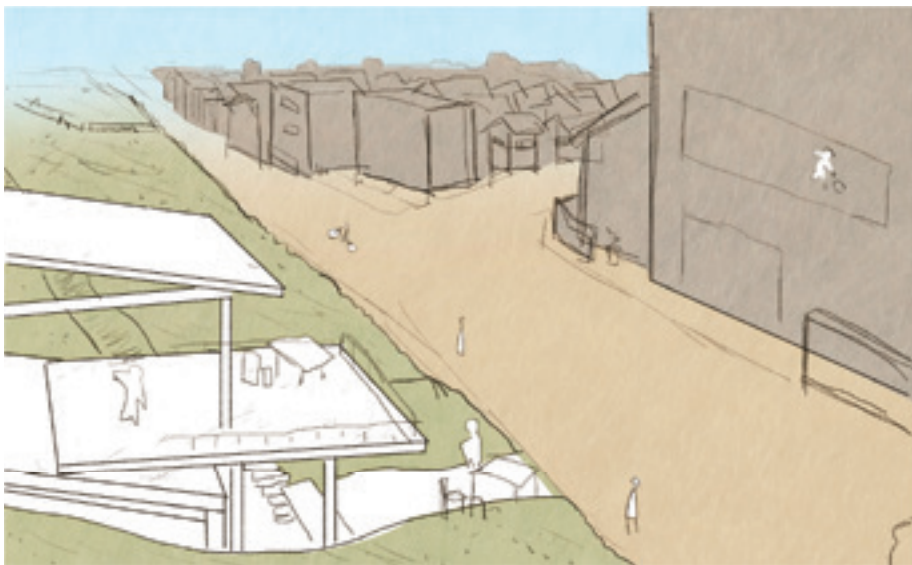
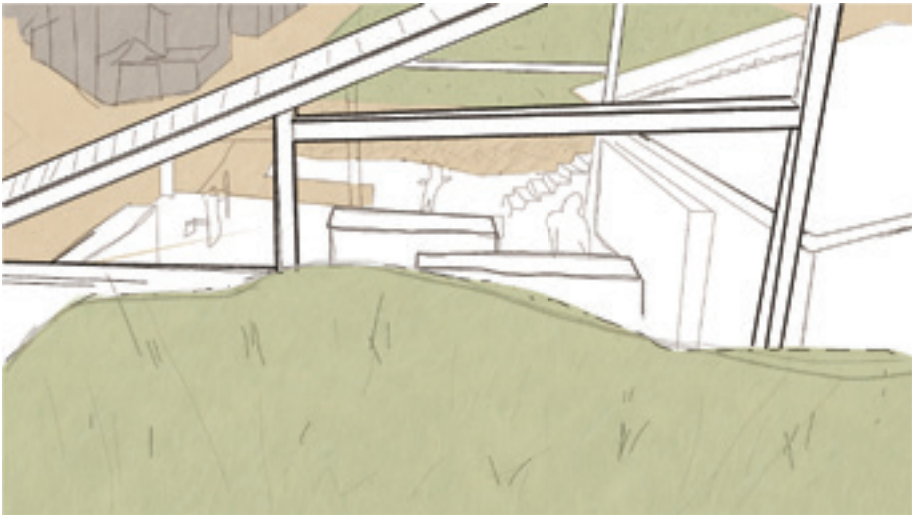
動線空間から堤防上の人が行き来する道に沿った屋根を掛けることによって、4つの動線建築のそれぞれが堤防全体とつながり、堤防上の広場にコントラストを与える。
もともと不必要なバイパスが通っていた堤防中段の道は、町の住民がイベントに用いる広場や裏庭として日常的に使われる居場所となる。



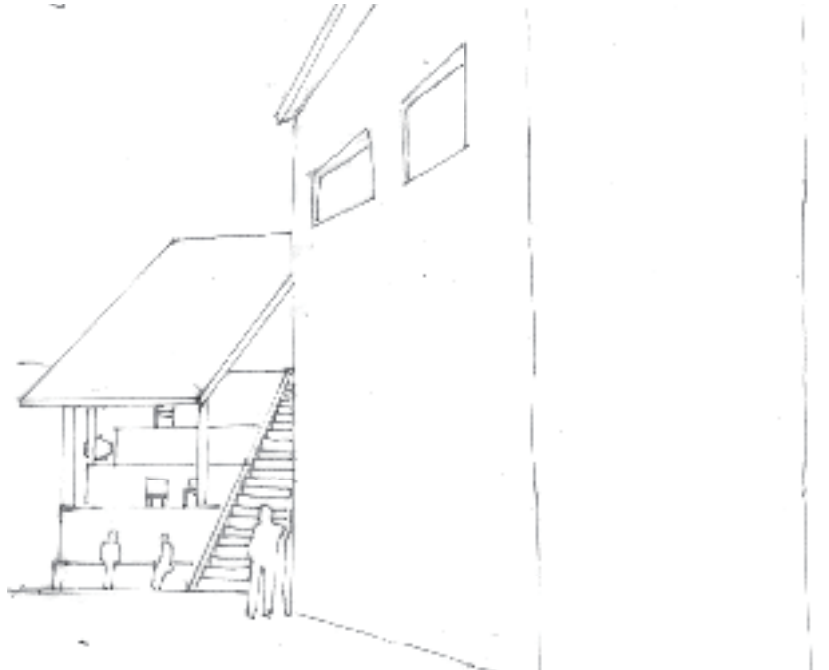
堤防に作られたくぼみや屋根の空間が客席やたまり場になる事で、学校や使い道のない空き地、神輿が通る祭りの道が堤防を通して一つの風景となる。

堤防が町の広場として共有されることで、堤防が町の財産となるだけでなく、堤防を引き継ぐことで災害に対する意識を町全体にもたらし、町と堤防を守るための共同体を作る。

広場がもたらした居場所のあり方を通じて、町の人が街中においてもその身体感覚によってそれぞれのコモンズのあり方を再発見する為の学びを得る。



この一年で自分を縛っていた色々なものが何となく見えた
自分の本心で見たり感じたり考えたりは始まったばかり。



堤防に作られたくぼみや屋根の空間が客席やたまり場になる事で、学校や使い道のない
空き地、神輿が通る祭りの道が堤防を通して一つの広場となる



さいごに

南さん、奥野さん

なおや、にしお

蜂谷君、三田君、小倉君

相談に乗ってくれたおかげで、迷走しがちだったものを何とか形にできました。独りで考えがちだったので、アドバイスをもらえたことで進めた事がとても大きかったです。本当にありがとうございました！夏に左近山に転がり込んでから、2人には色々な事を教えてもらいました。設計課題や院試で共に過ごせてとても心強かったです。来年は、自分も追いかけるので待っていてください！あとまたどこか行こう。自分が切羽詰まっていた時に来てくれて、とても勇気づけられました。今度は此方が助けに行きます！

Comments from Classmates

堤防の中に小さな居場所を作ることで、堤防を身体スケールに近づけていく姿勢には非常に共感を覚えました。せっかく土木に目を向けるなら、もっと基礎構造とか施工方法とかの話もあったら、より具体的な提案になったのではないかなとも思いました。

奥野慎

初めは木密への興味から始まった卒業設計であったが、木密自体を敷地にするとうまくいかなかった。迷ったら敷地に行くというのを続けるなかで、興味が変わっていった。最後、あれ木密はどうなったと思ったけど、場所と向き合い続ける姿はいいなと思いました。言葉にできない興味を追っていくことに躊躇してはいけないんだなあって学びました。また一緒に製図室やろう。

西尾昂紀

破天荒だった2つ上の代から見ると、みんな真面目で表現力もあってすごいと思いました。福岡の背骨と秋葉原は横国の思想に流されきらず自我を保てたので特に印象に残ってます。後輩で手伝ってたてしに関しては、ずいぶん迷ったなーという感じですが、作品の説明において価値判断が定まればもっと伝わるだろうなという感じがしました。横国は迷わせるけど、迷う人は決めることを大事にするとまういくよ、と優柔不断な僕はとてもそう思います。またなんでも語りましょう！ひとまずお疲れ！

南拓海

「てっしー」。ネス湖のネッシー改め「てっしー」と呼ばれる彼は大きい体に小さい気性を持つ。本人はそれを嫌がるかもしれないが、そんなチグハグさはよく魅力的に映り、可愛がられることもよくあると思う。そんな風に、いろいろ彼について特筆すべきことはあるが、もし一つ挙げるならば、とにかくデカイということが挙げられるだろう。彼は、いつも他の人の迷惑になるからといってデカすぎる体を申し訳なさそうに小さくしようとしている。そんな優しい彼がギリギリまで敷地選択に、そしてコンセプトに迷って、出てきた空間は土手であった。言うまでもないかもしれないが、彼の大きさが現れているように感じた。これからも大らかな空間を作り続けて欲しい。

坂田直哉